

多留歌の惰懶

治宰太

庫文空青

私の数ある悪徳の中で、最も顕著の悪徳は、怠惰たいだである。これは、もう、疑いをいれない。よほどのものである。こと、怠惰に關してだけは、私は、ほんものである。まさか、それを自慢しているわけではない。ほとほと、自分でも呆あきれている。私の、これは、最大欠陥である。たしかに、恥ちすべき、欠陥である。

怠惰ほど、いろいろ言い抜けのできる悪徳も、少い。臥がり竜。おれは、考えることをしている。ひるあんどん。面壁九年。さらに想を練り、案を構しえ。雌し伏。賢者のまきに動かんとするや、必ず愚色あり。熟慮。潔癖じやくへき。凝り性。おれの苦しき、わからんかね。仙脱。無慾。世が世なら、なあ。沈黙は金。塵事じんじうるさく。隅ぐまの親石おやいし。機未だ熟さず。出る杭くうたれる。寝ねていて転ぶうれいなし。無縫天衣。桃李とうり言いわざれども。絶望。豚に真珠。一朝、事あらば。ことあげせぬ国。ばかばかしくつて。大器晩成。自じ矜きやう、自愛。のこりも
 のには、福が来る。なんぞ彼等の思い無げなる。死後の名声。つまり、高級なんだね。千両役者だからね。晴耕雨読。三度固辞して動かかず。鷓かは、あれは唾おしの鳥です。天を相手にせよ。ジツドは、お金持なんだろう？

すべて、のらくら者の言い抜けである。私は、実際、恥かしい。苦しさも、へったくれ

もない。なぜ、書かないのか。実は、少しからだの工合いおかしいのでして、などと、せつぱつまつて、伏目がちに、あわれつぽく告白したりなどするのだが、一日にバット五十本以上も吸い尽くして、酒、のむとなると一升くらい平気でやって、そのあとお茶漬を、三杯もかきこんで、そんな病人あるものか。

要するに、怠惰なのである。いつまでも、こんな工合いでは、私は、とうてい見込みのない人間である。そう、きめて了うしまのは、私も、つらいのであるが、もうこれ以上、私たち、自身を甘やかしてはいけない。

苦しきだの、高邁こうまいだの、純潔だの、素直だの、もうそんなこと聞きたくない。書け。落語らくごでも、一口ひとくち噺ばなしでもいい。書かないのは、例外なく怠惰である。おろかな、おろかな、盲信である。人は、自分以上の仕事もできないし、自分以下の仕事もできない。働かないものには、権利がない。人間失格、あたりまえのことである。

そう思つて、しかめつらをして机のまえに坐るのであるが、さて、何もしない。頬杖ついて、ぼんやりしている。別段、深遠のことからを考えているわけではない。なまけ者の空想ほど、ばかばかしく途方とほうもないものはない。悪事千里、というが、なまけ者の空想もまた、ちよろちよろ止とめどなく流れ、走る。何を考えているのか。この男は、いま、旅行

に就いて考えている。汽車の旅行は退屈だ。飛行機がいい。動揺がひどいだろう。飛行機の中で煙草たばこを吸えるかしら。ゴルフパンツはいて、葡萄たべながら飛行機に乗っていると、恰好がいいだろうな。葡萄は、あれは、種を出すものなのかしら、種のまま呑みこむものなのかしら。葡萄の正しい食べかたを知りたい。などと、考えていること、まるで、おそろしく、とりとめがない。あわてて、がらつと机の引き出しをあげ、くしゃくしゃ引き出しの中を掻きまわして、おもむろに、一箇の耳かきを取り出し、大げさに顔をしかめ、耳の掃除をはじめめる。その竹の耳かきの一端には、ふさふさした兎の白い毛が附いていて、男は、その毛で自分の耳の中をくすぐり、目を細める。耳の掃除が終る。なんとということもない。それから、また、机の引き出しを、くしゃくしゃかきまわす。感冒除けよの黒いマスクを見つけた。そいつを、素早く、さつと顔にかけて、屹きつと眉毛を挙げ、眼をぎよろつと光らせて、左右を見まわす。なんとということもない。マスクをはずして、引き出しに収め、ぴたと引き出しをしめる。また、頬杖。とうもろこしは、あれは下品な食べものだ。あれの、正式の食べかたは、どうなのかしら。一本のとうもろこしに、食いついている姿は、ハアモニカを懸命に吹き鳴らしているようである。などと、ばかなことを、ふと考える。どんなにひどいニヒルにでも、最後まで付きまとうものは、食べものであるらしい。

しかもこの男は、味覚を知らない。味よりも、方法が問題であるらしい。めんどうくさい食べものには、見向きもしない。さんまなぞ、食べてみれば、あれは、おいしいものかも知れないが、この男は、それをきらう。とげがあるからである。いったいに魚肉をきらう様である。味覚の故ではなくして、とげを抜くのが面倒くさいのである。たいへん高価なものだそうであるが、鮎あゆの塩焼など、一向に喜ばない。申しわけみたいに、ちよつと箸はしでつついてみたりなどして、それつきり、振りむきもしない。玉子焼を好む。とげがないからである。豆腐を好む。やはり、食べるのに、なんの手数もいらぬからである。飲みものを好む。牛乳。スープ。葛湯くずゆ。うまいも、まずいもない。ただ、摂取するのに面倒がないからである。そう言えば、この男は、どうやら、暑い、寒いを知らないようである。夏、どんなに暑くても、団扇うちわの類たぐいを用いない。めんどうくさいからである。ひとから、きようはずいぶんお暑うございますね、と言われて団扇をさし出され、ああそうか、きようは暑いのか、とはじめて気が付き、大いにあわてて団扇を取りあげ、涼しげの顔してばさばさやってみるのであるが、すぐに厭あきて来て手を休め、ぼんやり膝の上で、その団扇をいじくりまわしているような仕末である。寒さも、知らないのではなからうか。誰かほかのひとでも火鉢に炭をついで呉れないことには、一日、火のない火鉢を抱いて、じつとしてい

る。動くものではない。ひとから、注意されないうちは、晩秋、初冬、嚴寒、平気な顔して夏の白いシャツを黙って着ている。

私は、腕をのぼし、机のわきの本棚から、或る日本の作家の、短篇集を取出し、口を、への字型に結んだ。何か、顕微鏡的な研究でもはじめるように、ものものしく気取って、一頁、一頁、ゆつくりペエジを繰っていった。この作家は、いまは巨匠といわれている。

変な文章ではあるが、読み易いので、私は、このような心のうつろな時には、取り出して読んでみるのである。好きなのであろう。もっともらしい顔して読んでいって、突然、げらげら笑い出した。この男の笑い声には、特色が在る。馬の笑いに似ている。私は、呆れあきたのである。その作家自身とおぼしき主人公が、ふんべつ顔して風呂敷持って、湖畔の別荘から、まちへ夕食のおかずを買いに出かけるところが書かれていたのであるが、いかにもその主人公のさまが、いそいそして、私には情なく、笑ってしまった。いい年をして、立派な男が、女房に言いつけられて、風呂敷持って、いそいそ町へ、ねぎ買いにかけるとは、これは、あまりにひどすぎる。怠け者にちがいない。こんな生活は、いかになんにもしないで、うろうろして、女房も見かねて、夕食の買い物をたのむ。よくあることだ。たのまれて、うん、ねぎを五銭だね、と首肯し、ばかなやつ、帯をしめ直して、何

か自分がいささかでも役に立つことがうれしく、いそいそ、風呂敷もつて、買物に出かける。情ない、情ない。眉ふとく、鬚ひげの剃り跡青き立派な男じやないか。私は、多少狼ろうば狽いして、その本を閉じ、そつと本棚へ返して、それからまた、なんということもない。

頬杖こしついて、うつそりしている。怠けものは、陸の動物にたとえれば、まず、歳としとつた病犬であろう。なりもふりもかまわず、四足をなげ出し、うす赤い腹をひくひく動かしながら、日向ひなたに一日じつとしてゐる。ひとがその傍を通つても、吠えるどころか、薄目をあけて、うつとり見送り、また眼をつぶる。みつともないものである。きたならしい。海の動物にたとえれば、なまこであろうか。なまこは、たまらない。いやらしい。ひとで、であろうか。べつとり岩にへばりついて、ときどき、そろつと指を動かして、そうして、ひとでは何も考えていない。ああ、たまらない、たまらない。私は猛然と立ち上る。

おどろくことは無い。御不浄へ行って来たのである。期待に添わざること、おびただし。立ったまま、ちよつと思案し、それから、のそのそ隣りの部屋へはいつていつて、

「おい、何か用がないかね？」

隣室では、家の者が、縫いものをしてゐる。

「はい、ございます。」顔もあげずに、そう答えて、「この鑊こてを焼いて置いて下さい。」

「あ、そうか。」

鍔を受けとり、大きな男が、また机のまえに坐つて、かたわらの火鉢の灰の中に、ぐいとその鍔をさし込むのである。

さし込んで、何か大役をいたしました者の如く、落ちつきはらつて、煙草を吸っている。これでは、何も、かの、風呂敷持つて、ねぎ買ひに行く姿と、異るところがない。もつと悪い。

つくづく呆れ、憎み、自分自身を殺したくさえなつて、ええッ！ と、やけくそになつて書き出した、文字が、なんと、

懶惰の歌留多。

ぼつり、ぼつり、考え、考えしながら書いてゆく所存と見える。

い、生くることにも心せき、感ずることも急がるる。

ヴィナスは海の泡から生れて、西風に導かれ、波のまにまに、サイプラスの島の浦曲に漂着した。四肢は気品よく細長く、しつとりと重くて、乳白色の皮膚のところどころ、す

なわち耳朶みみたぶ、すなわち頬、すなわち掌の裡、一様に薄い薔薇色ばらいろに染っていて、小さい顔は、かぐようほどに清浄であった。からだじゆうからレモンの匂いに似た高い香気が発していた。ヴィナスのこの美しさに魅せられた神々たちは、このひとこそは愛と美の女神であると言つてあがめたて、心ひそかに怪しけからぬ望をさえいだいたのである。

ヴィナスが白鳥に曳ひかせた二輪車に乗り、森や果樹園のなかを駈けめぐつて遊んでいると、怪しけからぬ望を持った数十人の神々たちは、二輪車の濛もつ々もつたる車塵を浴びながら汗を拭き拭き、そのあとを追いまわした。遊び疲れたヴィナスが森の奥の奥の冷い泉で、汗ばんだ四肢をこつそり洗つていると、あちらの樹間に、また、ついその草の茂みのおかげに、神々たちのいやらしい眼が光つていた。

ヴィナスは考えた。こんなに毎日うるさい思いをするよりは、いつそ誰かにこのからだをぶち投げてあげようか。これときめた一人の男のひとに、このからだを投げてやってしまおうか。

ヴィナスは決意した。一月一日の朝まだき、神々の御父ジュピター様の宮殿へおまいりの途中で逢つた三人目の男のひとを私の生涯おつとの夫ときめよう。ああ、ジュピター様、おたのみ申します、よい夫をおさずけ下さいますように。

元旦。ま白き被布を頭からひきかぶり、飛ぶようにして家を出た。森の小路で一人目の男のひとに逢った。見るからにむさくるしい毛むくじやらの神であった。森の出口の白樺の下で二人目の男のひとに逢った。ヴィナスの脚は、はたと止つて動かなんだ。男、りんりんたる美丈夫であつたのである。朝霧の中を腕組みして、ヴィナスの顔を見もせず、にゆつたりと歩いていった。「ああ、この人だ！ 三人目はこの人だ。二人目は、——二人目はこの白樺。」そう叫んでますらおの広いみ胸に身を投げた。

与えられた運命の風のまにまに身を任せ、そうして大事の一点で、ひらつと身をかわして、より高い運命を創る。宿命と、一点の人為的なる技術。ヴィナスの結婚は仕合せであつた。ますらおこそはジュピター様の御曹子、雷電の征服者ヴァルカンその人であつた。キュウピッドという愛くるしい子をさえなした。

諸君が二十世紀の都会の街路で、このような、うらないを、暮靄ひとめ避けつつ、ひそかに試みる場合、必ずしも律儀に三人目のひとを選ばずともよい。時に依つては、電柱を、ポストを、街路樹を、それぞれ一人に数え上げるがよい。キュウピッドの生れることは保証の限りでないけれども、ヴァルカン氏を得ることは確かである。私を信じなさい。

ろ、牢屋は暗い。

暗いばかりか、冬寒く、夏暑く、臭く、百万の蚊群。たまったものでない。

牢屋は、之は避けなければいけない。

けれども、ときどき思うのであるが、修身、齐家、治国、平天下、の順序には、固くこだわる必要はない。身いまだ修らず、一家もとより齊ととのわざるに、治国、平天下を考えなければならぬ場合も有るのである。むしろ順序を、逆にしてみると、爽快そうかいである。平天下、治国、齐家、修身。いい気持だ。

私は、河上肇博士の人柄を好きである。

は、母よ、子のために怒れ。

「いいえ、私には信じられない。悪いのは、あなただ。この子は、情のふかい子でした。この子は、いつでも弱いものをかばいました。この子は、私の子です。おお、よし。お泣きでない。こうしてお母さんが、来たからには、もう、指一本ふれさせまい！」

に、憎まれて憎まれて強くなる。

たまには、まともな小説を書けよ。おまえ、このごろ、やっと世間の評判も、よくなつて来たのに、また、こんなぐうたらな、いろは歌^{かるた}留多^たなんて、こまるじやないか。世間の人、おまえは、まだ病気がなおらないのではないかと、また疑い出すかも知れないよ。

私のいい友人たちは、そう言つて心配してくれるかも知れないが、それは、もう心配しなくていいのだ。私は、まだ、老人でない。このごろそれに気がついた。なんのことはない、すべて、これからである。未熟である。文章ひとつ、考え考えしながら書いている。まだまだ自分のことで一ぱいである。怒り、悲しみ、笑い、身悶^{みもた}えして、一日一日を送っている始末である。やはり、三十一歳は、三十一歳だけのことしかないのである。それに気がついたのである。あたりまえのことであるが、私は、これを有り難い発見だと思つている。戦争と平和や、カラマゾフ兄弟は、まだまだ私には、書けないのである。それは、もう、はつきり明言できるのである。絶対に書けない。気持だけは、行きとどいていても、それを持ちこたえる力量がないのである。けれども、私は、そんなに悲しんではいけない。

私は、長生きをしてみるつもりである。やってみるつもりである。この覚悟も、このごろ、やとついた。私は、文学を好きである。その点は、よほどのものである。これを茶化しては、いけない。好きでなければ、やれるものではない。信仰、——少しずつ、そいつがわかつて来るのだ。大きな男が、ふんべつ顔して、いろは歌留多などを作っている図は、まるで弁慶が手まりついて遊んでいる図か、仁王様が千代紙折っている図か、モオゼがパチンコで雀をねらっている図ぐらいに、すこぶる珍なものに見えるだろうと、思う。それは、知っている。けれども、それでいいと思つている。芸術とは、そんなものだ。大まじめである。見ることのできる者は、見るがよい。

もちろん私は、こんな形式のものばかり書いて、満足しているものではない。こんな、ややこしい形式は、私自身も、骨が折れて、いやだ。既成の小説の作法も、ちゃんと抜からずマスターしている筈である。現に、この小説の中にも、随所にずるく採用して在る。私も商人なのだから、そのへんは心得ている。所謂、いわゆるおとなしい小説も、これからは書くのである。どうも、こんなこと書きながら、みつともなく、顔がほてつて来て仕様がな_い。でも、これも、私のいい友人たちを安心させるために、どうしても、書いて置きたく思うのである。純粹を追うて、窒息するよりは、私は濁つても大きくなりた_いのである。

いまは、そう思っている。なんのことはない、一言で言える。負けたくないのである。

この作品が、健康か不健康か、それは読者がきめてくれるだろうと思うが、この作品は、決して、ぐうたらでは無い。ぐうたら、どころか、私は一生懸命である。こんな小説を、いま発表するのは、私にとって不利益かも知れない。けれども、三十一歳は、三十一歳なりに、いろいろな冒険してみるのが、ほんとうだと思っている。戦争と平和は、私にはまだ書けない。私は、これからも、様々に迷うだろう。くるしむだろう。波は荒いのである。

その点は、^{うぬぼ}自惚れていない。充分、小心なほどに、用心しているつもりである。この作品の形式も、情感も、結局、三十一歳のそれを一步も出ていないに違いない。けれども、私は、それに自信を持たなければいけない。三十一歳は、三十一歳みたいに書くより他に仕方が無い。それが一ばんいいのだと思っている。書きながら、へんに悲しくなってきた。こんなことを書いて、いけなかったのかも知れない。けれども、胸がわくわくして、どうしても書かずにいられなかったのだ。このごろは、全く、用心して用心して、薄氷を渡る気持ちで生活しているのである。ずいぶん、ひどく、やつつけられたから。

でも、もういい。私は、やってみる。まだ少し、ふらふらだが、そのうち丈夫に育つだろう。嘘をつかない生活は、決してたおれることは無いと、私は、まず、それを信じなけ

れば、いけない。

さて、むかしの話を一つしよう。

不仕合せである、と思つた。ひと、みな、私を、まだまだ仕合せなほうだよ、と評した。私は氣弱く、そうとも、そうとも、と首肯した。なにが不足で、あがくのだろう、好き好んで苦しみを買っているのだ、人生の、生活のディレッタント、運がよすぎて恐縮していやがる、あなたたちの女があるよ苦勞性と言つてね陰口だけを気にしている。

あるいはまた、佳人薄命、懷玉有罪、など言つて、私をして、いたく赤面させ、狼狽させて私に大酒のませる悪戯者いたずらものまで出て来た。

けれども、某夜、君は不幸な男だね、と普通の音声で言つて平氣でいた人、佐藤春夫である。私は、ぱつと行くてがひらけた実感に打たれ、ほんとにそう思いますか、と問いただした。私は、うすく微笑んでいたような氣がする。うん、不幸だ、とやはり氣易く首肯した。

もう一人、文藝春秋社のほの暗い応接室で、M・Sさん。きみと、しんじゆうするくらいに、きみを好いてくれるような、そんな、編輯者へんしゅうしゃでも出て来ぬかぎり、きみは、不幸な、作家だ、と一語ずつ区切つてはつきり言つた。そのように、きつぱり打ち明けて呉

れるSさんの瘦軀そうくに満ちた決意のほどを、私は尊いことに思った。

多くの場合、私はただ苦笑を以て報いられていたのである。多くの人々にとつて、私は、なんだかうるさい、ただ生意気な存在であつた。けれども私は、みんなを畏怖いふして、それから、みんなをすこしでも、そうして一時間でも永く楽しませ、自信を持たせ、大笑いさせた。そのことをのみ念じていた。私は盜賊のふりをした。乞食こじきの真似をさえして見せた。心の奥の一隅に、まことの盜賊を抱き、乞食の実感を宿し、懊惱おうのう転輾てんでんの日夜を送つてゐる弱い貧しい人の子は、私の素振りの陰に罪の兄貴を発見して、ひそかに安堵あんど、生きることへの自負心を持つて呉れるにちがいない、と信じていた。ばかなことを考えていたものである。たちまち私は、蹴落された。審判の秋。私は、にくしみの対象に変化していた。或る重要な一線に於いて、私は、明確におろそかであつた。怠惰であつた。一線、やぶれて、決河の勢、私は、生れ落ちるとからの極悪人よ、と指摘された。弱い貧しい人の子の怨嗟えんさ、嘲罵ちやうばの焰ほのおは、かつての罪の兄貴の耳朶みみたぶを焼いた。あちちちち、と可笑おかしい悲鳴挙げて、右往、左往、炬縁に寄れば、どんぐりの爆発、水瓶の水のもうとすれば、蟹かにの鋏はさみ、びっくり仰天、尻餅しりもちつけばおしりの下には熊蜂の巣、こはかなわずと庭へ飛び出たら、屋根からごろごろ白うすのお見舞い、かの猿蟹合戦、猿への刑罰そのままの八方ふさ

がり、息もたえだえ、魔窟の一室にころがり込んだ。

あの夜のことを、私は忘れぬ。死のうと思っていた。しかたが無いのである。酔いどれで、マントも脱がずにぶったおれて、

「やい、むかしの名妓というものは、」女は傍で笑っていた。「どんな奴やつにでも、なんでもなく身をまかせたんだ。水みたいに、のれんみたいに、そのまま身をまかせるんだ。そうしてモナ・リザみたいに少し唇ゆがめて、静かにしていると、お客は狂っちゃうんだ、

田地でんじ田畑でんぱた売りはらうんだ。いいかい、そこところは大事だぞ。むかしから名妓とうたわれているひとは、みんな、そうだった。むやみに、指輪なんかねだっちゃいけないんだ。いつまでも、だまって足りなそうにしているんだ。芸は売っても、からだは売らぬなんて、操みさおを固くしている人は、そこは女だ、やつぱりからだをまかせると、それっきりお客がつかず、どうしたって名妓には、なれないんだ。「ひどい話である。サタンの美学、名妓論の一端とでも言うのか。めちや苦茶のこと吐鳴どなり散らして、眠りこけた。

ふと眼をさますと、部屋は、まっくら。頭をもたげると枕もとに、真白い角封筒が一通きちんと置かれてあった。なぜかしら、どきツとした。光るほどに純白の封筒である。キチンと置かれていた。手を伸ばして、拾いとろうとすると、むなしく畳をひっ搔いた。は

ツと思つた。月かげなのだ。その魔窟の部屋のカーテンのすきまから、月光がしのびこんで、私の枕もとに真四角の月かげを落していたのだ。凝然ぎょうぜんとした。私は、月から手紙をもらった。言いしれぬ恐怖であつた。

いたたまらず、がばと跳ね起き、カーテンひらいて窓を押し開け、月を見たのである。

月は、他人の顔をしていた。何か言いかげようとして、私は、はっと息をのんでしまった。月は、それでも、知らんふりである。酷冷、徹底、どだい、人間なんて問題にしていけない。けたがちがう。私は醜く立ちつくし、苦笑でもなかつた、含羞がんしゆうでもなかつた、そんな生なまやさしいものではなかつた。唸うなつた。そのまま小さい、きりぎりすに成りたかつた。

甘つたれていやがる。自然の中に、小さく生きて行くことの、孤独、峻巖を知りました。かみなりに家を焼かれて瓜うりの花。その、はきだめの瓜の花一輪を、強く、大事に、育てて行こうと思ひました。

ほ、蛍の光、窓の雪。

清窓浄机、われこそ秀才と、書物ひらいて端座しても、ああ、その窓のそと、号外の鈴

の音が通るよ。それでも私たちは、勉強していなければいけないのだ。聞けよ、金魚もただ飼ひ放ちあるだけでは月余の命もたず、と。

へ、兵を送りてかなしかり。

戦地へ行く兵隊さんを見送つて、泣いては、いけないかしら。どうしても、涙が出て出て、だめなんだ、おゆるし下さい。

と、とてもこの世は、みな地獄。

不^{しのばず}忍の池、と或る夜ふと口をついて出て、それから、おや？ 可笑しな名詞だな、と氣附いた。これには、きつとこんな由来があつたのだ。それにちがいない。

たしかな年代は、わからぬ。江戸の旗本かんむりの家に、冠若太郎という十七歳の少年がいた。さくらの花びらのように美しい少年であつた。竹馬ちくばの友に由良小次郎ゆらという、十八歳の少年武士があつた。これは、三日月のように美しい少年であつた。冬の曇日、愛馬の手綱の

握りかたに就いて、その作法に就いて、二人のあいだに意見の相違が生じ、争論の末、一方の少年の、にやりという片頬の薄笑いも、もう一方の少年を激怒させた。

「切る。」

「よろしい。ゆるさぬ。」決闘の約束をしてしまった。

その約束の日、由良氏は家を出ようとして、冷雨ひさめびしよびしよ。内へひきかえして、傘さして出かけた。申し合せたところは、上野の山である。途中、傘なくしてまちの家の軒下に雨宿りしている冠氏の姿を認めた。冠氏は、薄紅の山茶花さざんかの如く寒しげに、肩を小さく窄すぼめ、困惑の有様であった。

「おい。」と由良氏は声を掛けた。

冠氏は、きよろとして由良氏を見つけ、にっと笑った。由良氏も、すこし頬を染めた。

「行こう。」

「うむ。」冷雨の中を、ふたり並んで歩いた。

一つの傘に、ふたり、頭を寄せて、歩いていた。そうして、さだめの地点に行きついた。

「用意は？」

「できている。」

すなわち刀を抜いて、向き合つて、ふたり同時にぷつと噴き出した。切り結んで、冠氏が負けた。由良氏は、冠氏の息の根を止めたのである。

刀の血を、上野の池で洗つて清めた。

「遺恨は遺恨だ。武士の意地。約束は曲げられぬ。」

その日より、人呼んで、不^{しのばす}忍の池。味気ない世の中である。

ち、畜生のかなしさ。

むかしの築城の大家は、城の設計にあたつて、その城の^{はいきよ}廃墟になつたときの姿を、最も顧慮して図をひいた。廃墟になつてから、ぐんと姿がよくなるように設計して置くのである。むかしの花火つくりの名人は、打ちあげられて、玉が空中でぼんと割れる、あの音に最も苦心を払つた。花火は聞くもの。陶器は、掌に載せたときの重さが、一ばん大事である。古来、名工と言われるほどの人は、皆この重さについて、最も苦慮した。

などと、もつともらしい顔して家の者たちに教えてやると、家の者たちは、感心して聞いている。なに、みな、でたらめなのだ。そんなばからしいこと、なんの本にだつて書か

れてはいない。

また言う。

こいしくば、たずね来て見よいずみなる、しのだの森のうらみくずの葉。これは、誰でも知っている。牝めすの狐の作った歌である。うらみくずの葉というところ、やつぱり畜生の、あさましい恋情がこもっていて、はかなく、悲しいのである。底の底に、何か凄すこい、この世のものでない恐ろしさが感じられるのである。むかし、江戸深川の旗本の妻女が、若くして死んだ。女兒ひとりをのこしていった。一夜、夫の枕もとに現われて、歌を詠よんだ。闇の夜よの、におい山路やまみちたどりゆき、かなな哭なく声に消えまよいけり。におい山路は、冥土めいどに在る山の名前かも知れない。かなは、女兒の名であらう。消えまよいけりは、いかにも若い女の幽霊らしく、あわれではないか。

いまひとつ、これも妖ようかい怪かいの作った歌であるが、事情は、つまびらかでない。意味も、はつきりしないのだが、やはり、この世のものでない凄せい惨さんさが、感じられるのである。それは、こんな歌である。わぎもこを、いとおし見れば青鷺あおさぎや、言ことの葉なきをうらみぎらまし。

そうして白状すれば、みんな私のフィクションである。フィクションの動機は、それは

作者の愛情である。私は、そう信じている。サタニズムではない。

り、竜宮さまは海の底。

老^{ろうはい}憊の肉体を抱き、見果てぬ夢を追い、荒涼の磯をさまようもの、白髪の浦島太郎は、やはりこの世にうようよ居る。かなぶんぶんを、バットの箱にいられて、その虫のあがく足音、かさかさというのを聞きながら目を細めて、これは私のオルゴオルだ、なんて、ずいぶん悲惨なことである。古くは、ドイツ皇帝。または、エチオピア皇帝。きのうの夕刊に依ると、スペイン大統領、アサーニア氏も、とうとう辞職してしまった。もつとも、これらの人たちは、案外のんきに、自適しているのかも知れない。桜の園を売り払っても、なかに山野には、桜の名所がたくさん在る、そいつを皆わがものと思って眺めてたのしむのさ、と、そこは豪傑たち、さっぱりしているかも知れない。けれども私は、ときどき思うことがある。宋美齡は、いつたい、どうするだろう。

ぬ、沼の狐火。

北国の夏の夜は、ゆかた一枚では、肌寒い感じである。当時、私は十八歳、高等学校の一年生であった。暑中休暇に、ふるさとの邑むらへかえつて、邑のはずれのお稲荷いなりの沼に、毎夜、毎夜、五つ六つの狐火が燃えるという噂を聞いた。

月の無い夜、私は自転車に提ちようちん灯をつけて、狐火を見に出かけた。幅はば一尺か、五寸くらいの心細い野道を、夏草の露を避けながら、ゆらゆら自転車に乗っていった。みちみち、きりぎりすの声うるさく、ほたるも、ばら撒まかれたようにたくさん光っていた。お稲荷の鳥居をくぐり、うるしの並木路を走り抜け、私は無意味やたらに自転車の鈴を鳴らした。沼の岸に行きついて、自転車の前輪が、ずぶずぶぬかった。私は、自転車から降りて、ほつと小さい溜息。狐火を見た。

沼の対岸、一つ、二つ、三つの赤いまるい火が、ゆらゆら並んでうかんでいた。私は自転車をひきずりながら、沼の岸づたいに歩いていった。周囲十丁くらいの小さい沼である。近寄ってみると、五人の老翁ろうやうが、むしろをひいて酒盛さかもりをしていた。狐火は、沼の岸の柳の枝にぶらさげた三個の燈籠であった。運動会の日の丸の燈籠である。老翁たちは、私の顔を覚えていて、みんな手を拍うつて笑つて、私を歓迎した。私は、その五人のうちの二

人の老翁を知っていた。ひとりには米屋で破産、ひとりには汚い女をおめかけに持つて痴呆ちほうになり、ともにふるさとの、笑いものであった。沼の水を渡つて来る風は、とても臭い。

五人のもの、毎夜ここに集い、句会をひらいているというのである。私の自転車の提灯の火を見て、さては、狐火、と魂消たましひしましたぞ、などと相かえり見て言つて、またひとりきり笑いさざめくのである。私は、冷いにごり酒を二、三杯のまされ、そうして、かれらの句というものを、いくつか見せつけられたのである。いずれも、ひどく下手くそであった。すすきのかげの、されこうべ、などという句もあつた。私はそのまま、自転車に乗つて家へかへつた。

「明月や、座に美しき顔もなし。」芭蕉も、ひどいことを言つたものだ。

る、流転輪廻りんね。

ここには、或る帝大教授の身の上を書こうと思つたのであるが、それが、なかなかむづかしい。その教授は、つい二、三日まえに、起訴された。左傾思想、ということになつてゐる。けれども、この教授は、五六年まえ、私たち学生のころ、自ら学生の左傾思想の善

導者を以て任じていた筈はずである。そうして、そのころの教授の、善導の言論も、やはり今日の起訴の理由の一つとして挙げられている。そのへんが、なかなかむずかしいのである。もう四、五日余裕があれば、私も、いろいろと思索し、工夫をこらして、これを、なんとか一つの物語にまとめあげて、お目にかけるのだが、きようは、すでに三月二日である。この雑誌は、三月十日前後に発売されるらしいのだから、きようあたりは、それこそぎりぎりの締切日なのであろう。私は、きようは、どんなことがあっても、この原稿を印刷所へ、とどけなければいけない。そう約束したのである。こんな、苦しい思いをするのも、つまりは日常の怠惰の故である。こんなことでは、たしかにいけない。覚悟ばかりは、たいへんでも、今までみたいに怠けていたんじや、ろくな小説家になれない。

を、姥捨山のみねの松風。

もって自戒とすべし。もういちど、こんな醜態を繰り返したら、それこそは、もう姥捨山だ。懶惰の歌留多。文字どおり、これは懶惰の歌留多になってしまった。はじめから、そのつもりでは、なかつたのか？ いいえ、もう、そんな嘘は吐きません。

わ、われ山にむかいて眼を挙ぐ。

か、下民しいたげ易く、上天あざむき難し。

よ、夜の次には、朝が来る。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集²⁾」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年9月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年9月11日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

懶惰の歌留多

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>